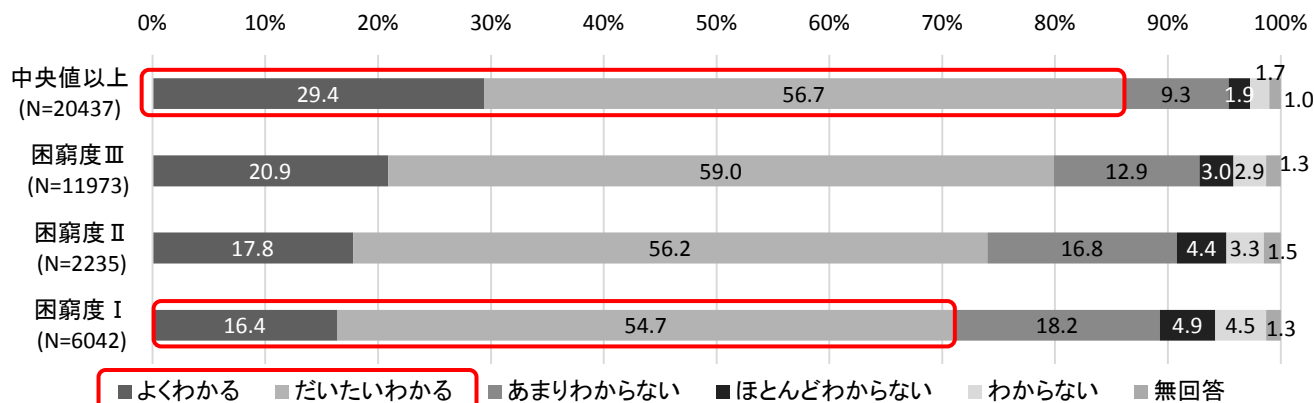
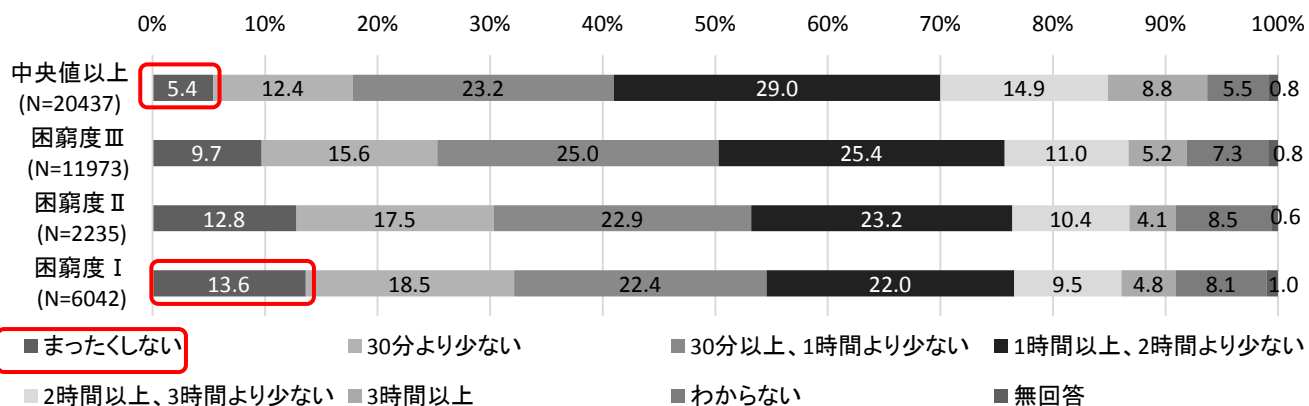


■ 調査結果から分かったこと

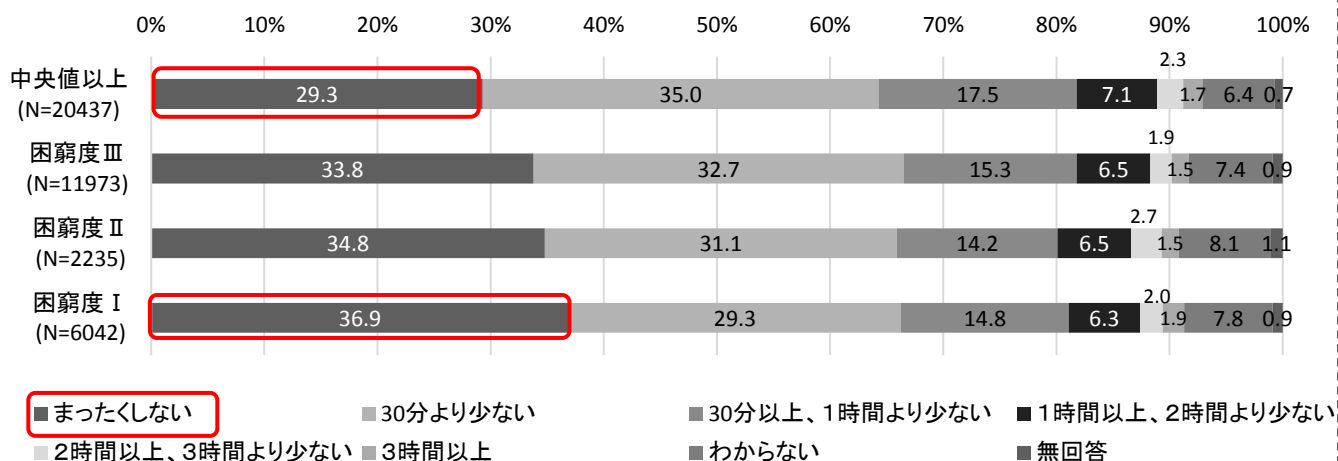
◇ 困窮世帯ほど学習理解度について「よくわかる」「だいたいわかる」の割合が低い。



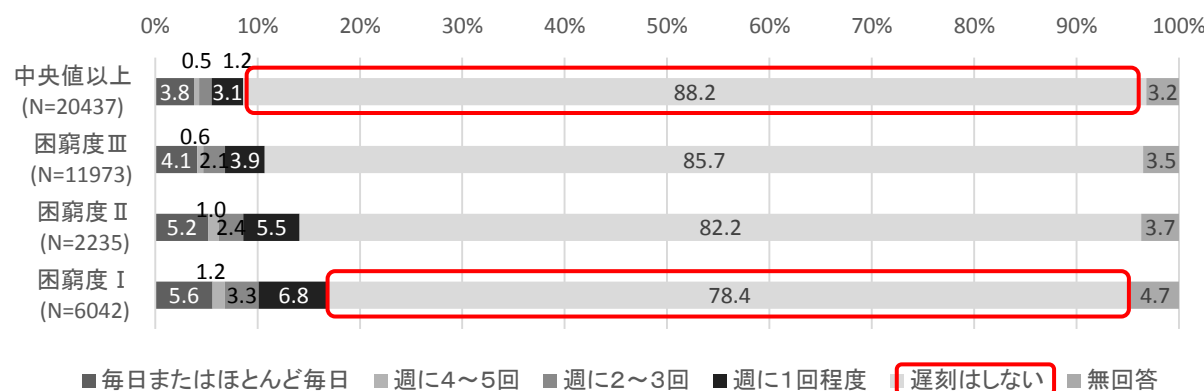
◇ 困窮世帯ほど授業時間以外の勉強時間について「まったくしない」の割合が高い。



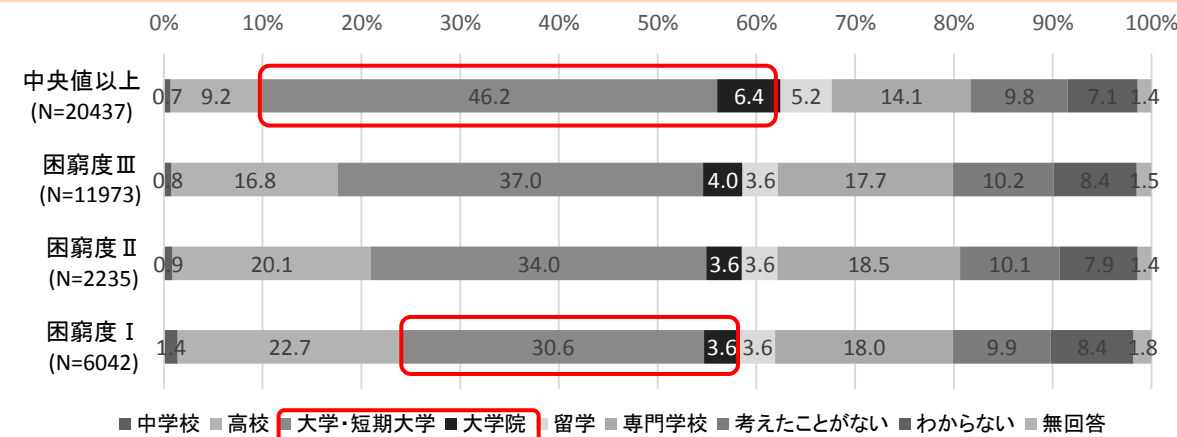
◇ 授業時間以外の読書について、困窮世帯ほど「まったくしない」の割合が高い。



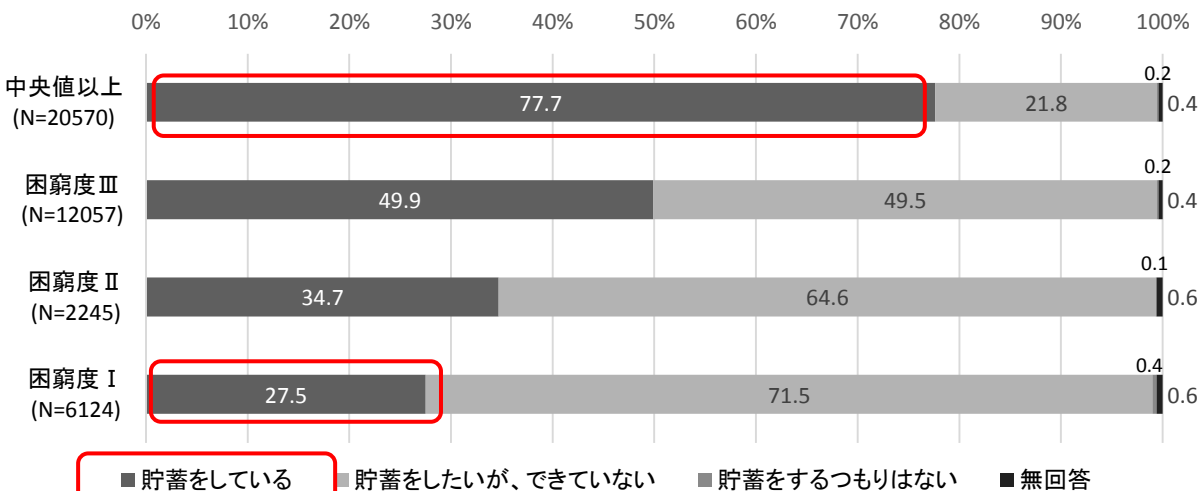
◇ 困窮世帯ほど遅刻する割合が高い。



◇ 子ども自身の進学希望について、困窮世帯ほど「大学・短大・大学院」の割合は低い。

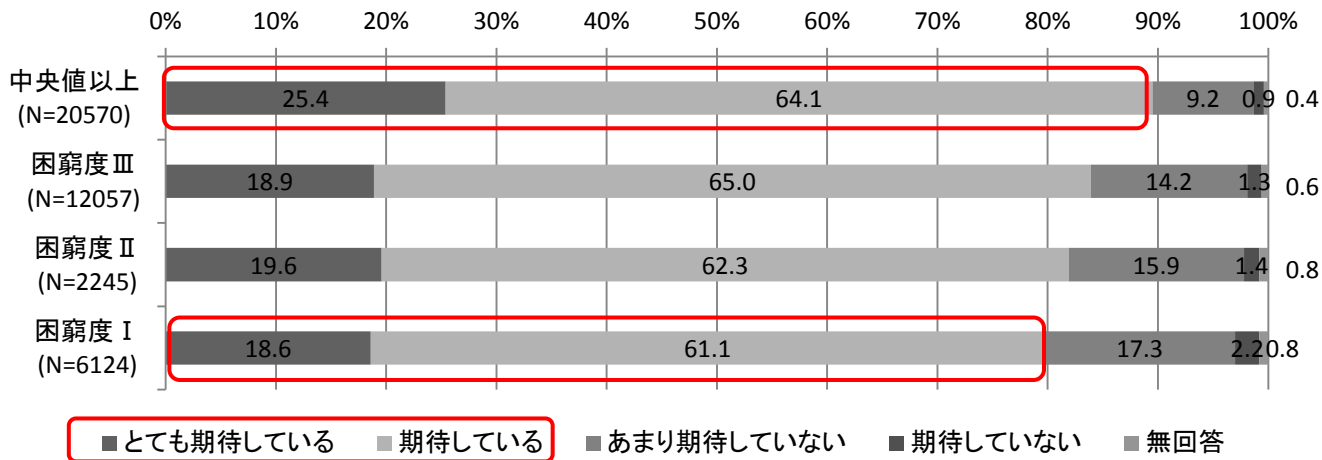


◇ 困窮世帯ほど子どもの将来のための貯蓄ができていない

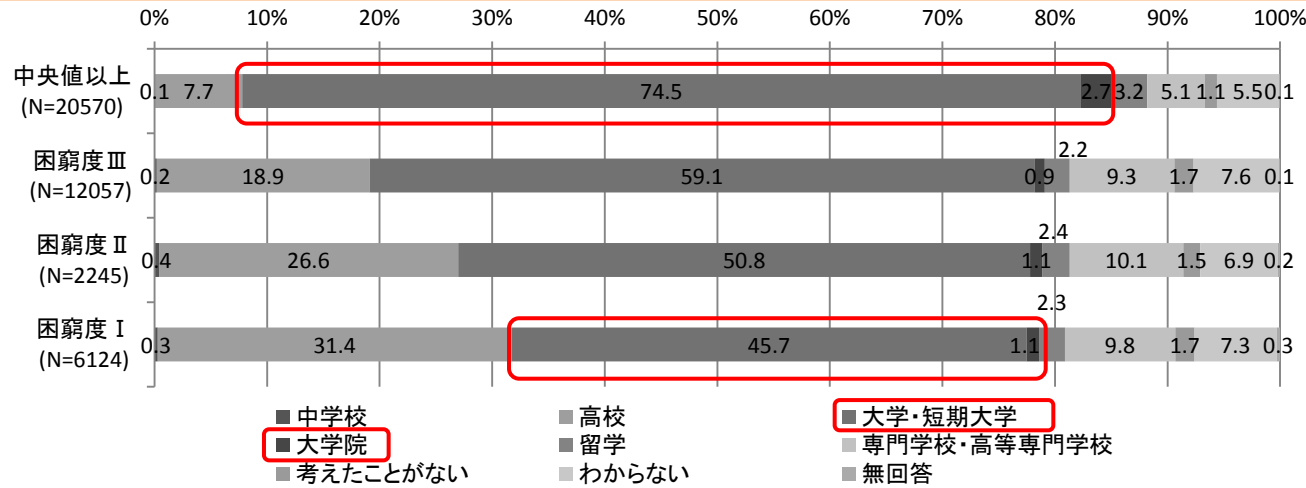


■調査結果から分かったこと

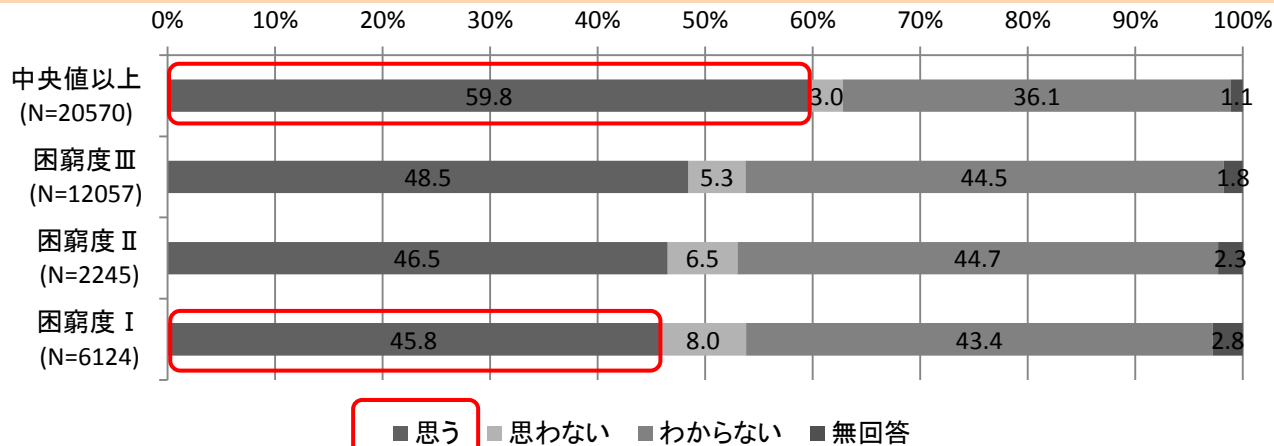
◇困窮世帯ほど子どもに対して「とても期待している」「期待している」割合が低い。



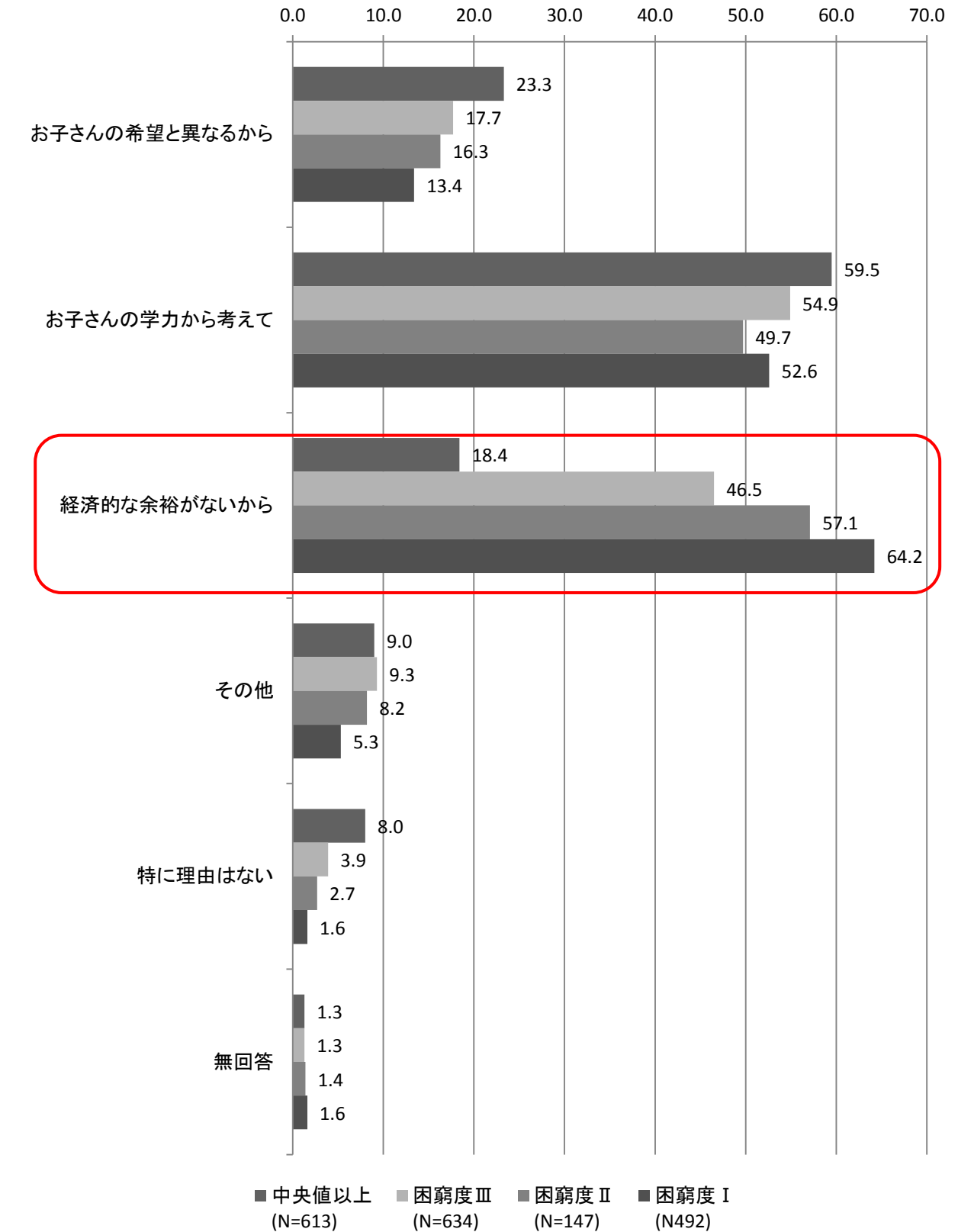
◇保護者の子どもの進学希望について、困窮世帯ほど「短期大学・大学・大学院」の割合が低い。



◇保護者の子どもの進学希望の実現について、困窮世帯ほどできると「思う」と回答した割合が低い。



◇子どもの進学希望が実現できない理由については、困窮世帯ほど「経済的な余裕がないから」の割合が高い。



■調査結果から分かったこと

- ◇「同じ時刻に起きている」子どもの方が勉強時間が「30分以上、1時間より少ない」、「1時間以上、2時間より少ない」、「2時間以上、3時間より少ない」の割合が高い。
- ◇「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる子どもの方が「30分以上、1時間より少ない」、「1時間以上、2時間より少ない」、「2時間以上、3時間より少ない」の割合が高い。

※「起床時間」と「朝食の頻度」について、次の2つのグループに分け、「授業以外の勉強時間」とクロス集計を行った。

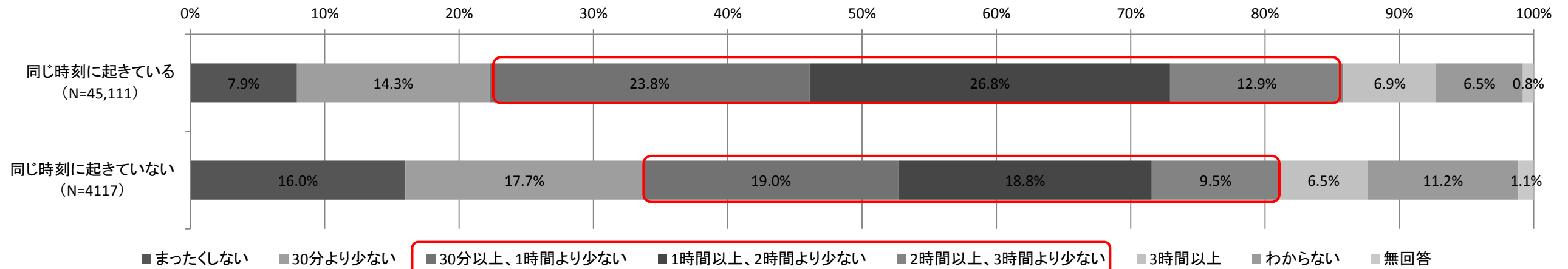
(起床時間) 『同じ時刻に起きている』:「起きている」「どちらかと言えば、起きている」と回答した子ども

『同じ時刻に起きていない』:「あまり、起きていない」「起きていない」と回答した子ども

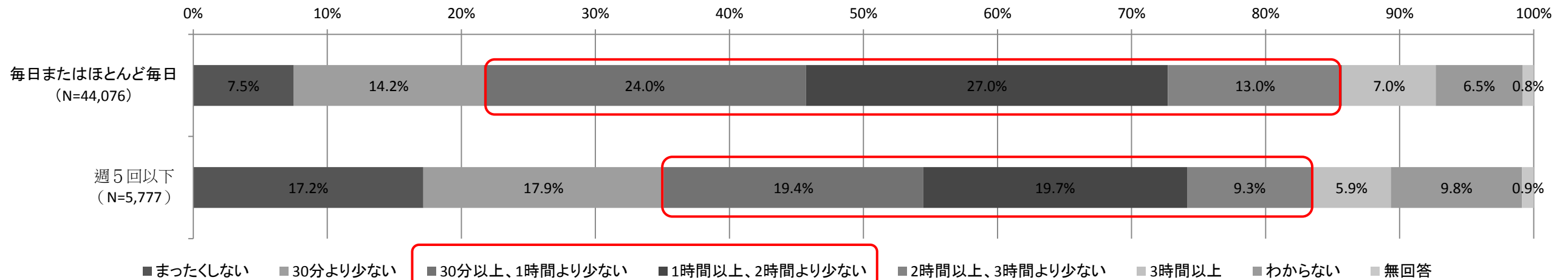
(朝食の頻度) 『毎日またはほとんど毎日』:「毎日またはほとんど毎日」

『週5回以下』:「毎日またはほとんど毎日」以外

起床時間と授業以外の勉強時間の関係



朝食の摂取と授業以外の勉強時間の関係



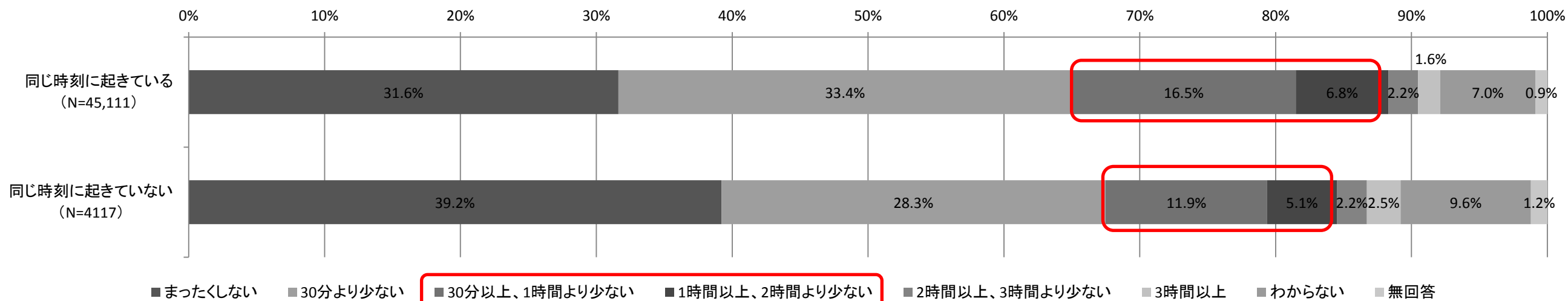
■調査結果から分かったこと

- ◇「同じ時刻に起きている」子どもの方が勉強時間が「30分以上、1時間より少ない」、「1時間以上、2時間より少ない」の割合が高い。
- ◇「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる子どもの方が「30分以上、1時間より少ない」、「1時間以上、2時間より少ない」の割合が高い。

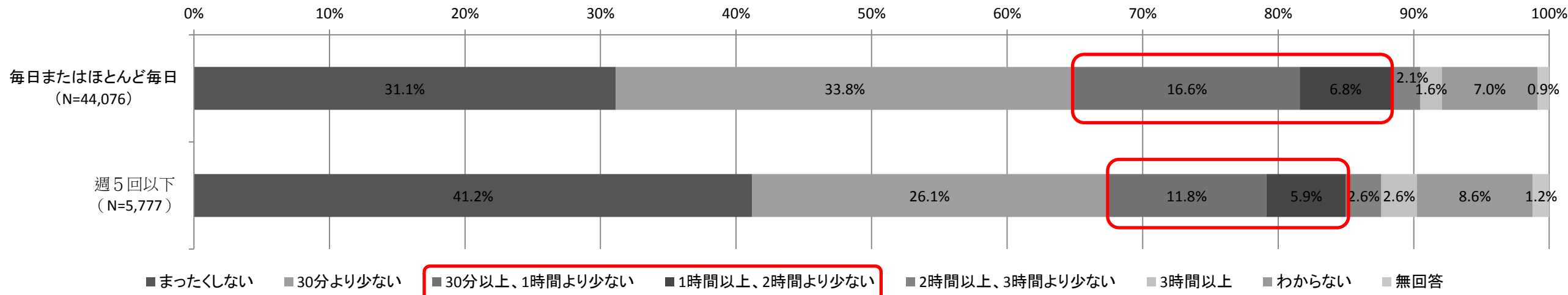
※「起床時間」と「朝食の頻度」について、次の2つのグループに分け、「授業以外の読書時間」とクロス集計を行った。

- (起床時間) 『同じ時刻に起きている』:「起きている」「どちらかと言えば、起きている」と回答した子ども
『同じ時刻に起きていない』:「あまり、起きていない」「起きていない」と回答した子ども
- (朝食の頻度) 『毎日またはほとんど毎日』:「毎日またはほとんど毎日」
『週5回以下』:「毎日またはほとんど毎日」以外

起床時間と授業以外の読書時間の関係

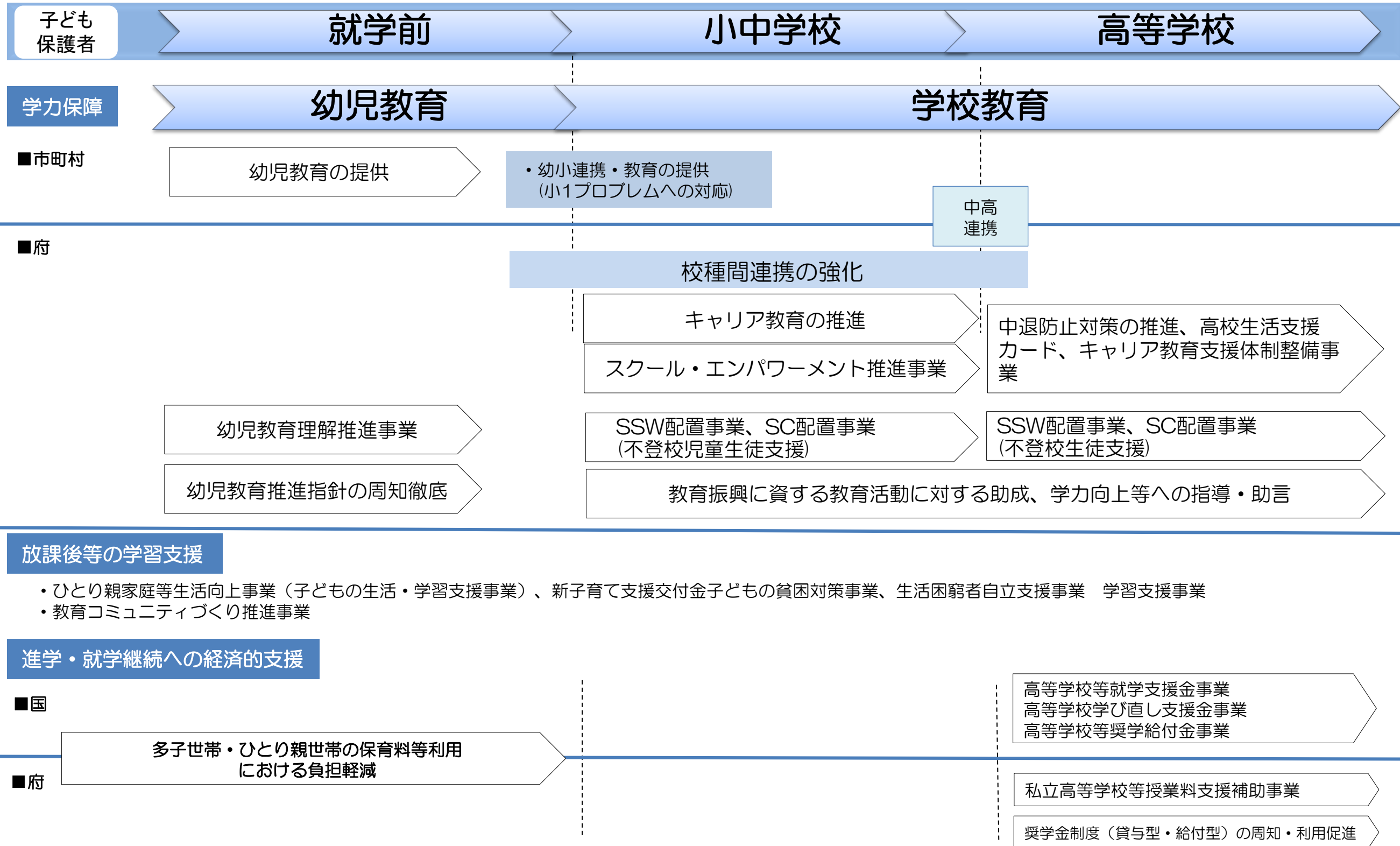


朝食摂取と授業以外の読書時間の関係



■ 現行の取組み

- 学力保障では、校種間の連携等を通じ、就学前から高等学校まで切れ目ない支援を実施。学力向上等に資する各施策に取り組むとともに、SSWやSCなどの福祉的人材の配置等を通じ、子どもが抱える課題の早期発見に取り組んでいる。
- 進学・就学継続への経済的支援では、主に奨学金の給付や制度の周知に取り組んでいる。



主な課題

(教育環境について)

⇒資料1 P245・280

○困窮している世帯ほど子どもの教育にかかる環境が整っていないため、子どもたちが安心して学習や進学希望をもつことができるような教育環境が必要。

⇒資料1 P280

○学校というすべての子どもが集まる場に、様々な事業や職種等を入れることにより学校生活を支援し、子どもの最善の利益を保障していくような取り組みが必要。

⇒資料1 P279

○格差・貧困が子どもにもたらす影響について、教職員の理解を深めることが必要。

(家庭教育について)

⇒資料1 P245・279

○「同じ時刻に起きていない」、「朝食を毎日食べない」など生活習慣が確立していない子どもの方が勉強や読書を「まったくしない」割合が多い。

これらの生活習慣は困窮世帯ほど確立していない傾向が見られるため、基本的な生活習慣の大切さや子どもとの会話の意義といった家庭教育の重要性を保護者に届ける施策が必要。

○親支援プログラム等の保護者支援については学校の場で行うことを検討する必要。

(地域の学習支援について)

⇒資料1 P280

○地域における学習支援については、地域の実情により実施場所の工夫や、勉強だけではなく、読書やニュースの話、社会体験、モデル提示など様々な要素を併せ持った支援が必要。

方向性

(教育環境について)

- * 子どもたちが多様な進路展望を持つことができるよう、キャリア教育を推進。また、多様な進学選択が可能となるように、奨学金制度等の周知・利用促進を引き続き実施。
- * 学校や地域で支援を要する子どもを発見し、支援につなぎ、見守る体制を強化することで、セーフティネットでしっかりと支える仕組みを構築。
- * 昼間保護者のいない家庭の小学生児童の健全育成を図るため、放課後児童健全育成事業(放課後児童クラブ)を推進。
- * 様々な職業、経験を有する地域人材が、登下校の安全見守り、授業補助、放課後の学習支援等に参画し、子どもたちと交流している「学校支援地域本部」等の活動や、地域の方々の参画により放課後や土曜日等において、豊かな体験・交流に向けた活動が行われている「おおさか元気広場」の推進。
- * 府立高校においては、全校にスクールカウンセラーを配置し、様々な悩みや不安を抱える子どもたちが安心して相談できる教育相談体制を充実。様々な課題を抱える生徒が多く在籍する府立高校にスクールソーシャルワーカー等を配置し、福祉や労働等の社会資源につなぐことで課題の解決を支援し、学校への定着を図る。
- * 中退防止対策として、作成した事例集の活用を図るとともに、効果的な取組みについてフォーラムを通じて府立高校に全体化する等、中退防止の取組みを推進。
- * 大阪府教育センターにおいて人権教育に関する研修のみならず、各種研修において、子どもの貧困を取り上げた研修を推進。

(家庭教育について)

- * 基本的な生活習慣の確立や子どもとのコミュニケーションの重要性について、「親学習」や「訪問型支援」により、保護者が「学び」「気づく」取組みを実施しているが、今後、取組みの更なる実施拡大や内容の充実を図る。
- * 学校に保護者が集まる機会を捉え、地域人材による「親学習」を実施しており、子育てについて「学び」「気づく」機会となるとともに、保護者同士のつながりづくりの場となっているが、今後、更なる実施拡大、内容の充実を図る。

(地域の学習支援について)

- * 地域の実情に応じた学習支援が実施できるよう交付金等の活用により市町村を支援。
- * 生活困窮者自立支援制度に基づく学習支援事業(任意事業)では、「学習支援」、「居場所の提供」、「親に対する養育支援」、「居場所づくり」、「家庭訪問」など様々な支援メニューがあり、府としては、府内の各自治体に対して、学習支援事業の取組み促進や広域支援を引き続き推進。